

東京都渋谷公園通りギャラリー

交流プログラム 「渋谷ラジオ」

令和6年度番組 「展覧会のあと」

ゲスト5：米田昌功さんをお招きした回のうち、#19のテキストです。

○河原 美術教育の米田さんのこれまでの活動の話もちよっと聞きたかったけど、今ちよっとおっしゃってましたもんね、美術の授業と美術部はやり方を変えていたり、結構、今面白いなと思ったのは、過程があるっておっしゃったじゃないですか。美術教育の最初に同じ工程があって、最終的に違いが出たり。やっぱり教育、恐らく歴史的なところもあると思うんですけど、障害のある方が社会と関わるという点で、職業的な訓練とか何か完成されたものを作るという教育を重視するみたいな、そういったところも多分あって、なので、物づくりみたいなところと少し距離があるような印象が個人的にはあるんですけども。

○米田 あります、あります。いや、分かります、すごく。やっぱり、ほらパラリンピックとかがあって、そこに出ている選手たちって、科学的な裏づけだったりとかそういうことも含めて、機械工学とかそういうものもあって、車椅子をもっと強化したりとかっていうような、本人も物すごい志を持ってどんどんスキルアップして行って、向かっていくっていう、そういう美術も今もあるし。(笑)

○河原 スキル向上。

○米田 そうそうそう。特に肢体不自由の方とかに多いと思うんですけど、やっぱり写実的な絵を描きたいとか、そういうところでスキルアップを目指して、障害のあるなし関係なく技術を高めて、そこで1つ評価を得たいというようなところもあると思うんですよ。でも、それはそれとしてあって、その一方で、その人とは全く関係なく、日常の中でいつの間にか作品があふれ返っているっていうような人たちもいて、ココペリとか、あとは今センターとしていろんなココペリ以外の作家さんとかも本当にたくさん関わっているんですけども、やっぱりその人がどの場所にいるかというのをすごく気をつけて見ているんですよ。

○河原 どの場所にいるか。

○米田 本人の意識とかも含めてですよ。例えば単純に言うと、創作活動をしているだけで満足できる人なのか、褒められてもっと次のところに行きたい人なのか、ただ横に誰

かにいてほしい人なのかとか。それによってスキルアップを目指したいという人であれば、例えば本当に描き方を伝えたりとか、そういうことはどんどんやっていってもいいと思っているんですよ。いわゆるアール・ブリュットという定義とかとは全く違う、障害者のアートとしてですよ。そういうアプローチというのをどんどんやるべきだと思っているし、その一方で、いわゆるアール・ブリュットの世界にいる人たちの、そこではそういうアプローチをすると、1回入ってしまったら、多分みんな素直やからどんどんそっちに向かっていってしまうんで、そうではなくて、本人らしさだったりとか、本人にしかない表現の方法というのを守っていかなきゃならない。守っていったほうがいい。表現したくないって言ったら、それで周りは受け入れていかなきゃならない人たちだから、そこら辺の、自分がそれをちゃんとなるべく、理解し切れないかもしれないけれども、そういうところをちゃんと見て、それに応じた関わりというのをしなきゃならないって思っていて、そういうのも、一緒に関わってくれる人にもそういうことはお伝えしたいなと思っていて。

○河原 「ばーと」の活動ですよ。

○米田 そうですね。ばーとの活動は、これですね。

○河原 すごい、図が目の前に出てきましたけど。

○米田 2つのベクトルがあって、1個は障害を生かすという縦のベクトルがあって、こっちは障害を乗り越えていくとか、そういう完成を目指すとか、こっちは過程を重視するような。こっちは、横のベクトルとしては、日常とか、意図しないとか、自然というのがあって、反対側に練習したりとかプラクティスとか、伝統とか、意図するみたいなのがあって、今言ったアスリートたちの世界というのは、ここに向かっていく、精神性とか、意欲とかって。

○河原 技術とか。

○米田 うん。それで、いわゆるこういう世界とは別に、もう既に確立した世界を持っているような人たちも、そういう作家も、アーティストも、山下清だったりとかそういう世界もありますけれども、私の勝手な解釈なんですけど、今までは多分美術ってここ、これだけしかなかったんですよ、美術の世界というのは。そこにアール・ブリュットという位置づけをデュビュッフェがつくって、ここにあるんだけど、皆あるのは分かっているけど、美術としては扱っていなかったというか。でも、こっちに現代アートがどんどん突き進んでいって、乱暴な言い方をすると、現代アートって人がやっていない表現をするということじゃないですか。

○河原 そうですね、どんどん更新して、何か進歩的にどんどん先に先についていう感じですね。

○米田 うん。ピカソもまた、確かにそうなんですけど、こっちに行けば行くほど、やっていないことを探すと、こっちのことをやろう。ここにいながら、これをやるというような人が増えていきますよね。

○河原 うんうん。

○米田 そうすると、結局ここにもともとあった人たちの作品というのは、更新する前に、既にもう誰も見ていない、知らないような表現がいっぱいここに集まっていたんで、結局、現代アートが多様化すればするほどここを無視できなくなってきたということで、この作品が評価されるようになったというか。この中の、その目の前にいる人が、このどこににいるかというところを私はすごく気にしていて。

○河原 なるほど。一言で言い切れないですもんね。アール・ブリュットの作家とか、障害のある、障害といってもいろんな種類のグラデーションのあるものですし、その個人がどこに向かって頑張っているのかとかという指標になるような図が。なるほど。確かに今おっしゃったみたいに、現代アートが無視できないものがもう大量にあるというのが今現状というか、近代美術の巨匠たちもすごく注目していたような、そういう歴史的なものもあったりすると思うので、その頃からやはり、その前からあったもので、だんだんその頃から知られるようになってきたというか、注目されるように。

○米田 岡本太郎とかピカソとかが気にしていた民俗文化とか、ああいうものってこの辺なんですね。

○河原 確かに伝統寄りの。

○米田 練習、やっぱりテクニックというのが入ってくる。この一見無意味とか、そういうのがありつつ、ちょっとアール・ブリュットと重なっているみたいな。

○河原 儀式的な、宗教的な、意味はちょっと分からないが、残されてきた伝統の仮面だったり彫像だったりって、そういったところが。

○米田 そこをちゃんとその子の個性を見るというのは、鑑賞者側からしたら、作品の個性とか独創性だけで楽しむということで、そこで完結していいんだけど、関わる者としては、作品の個性というのがその人物の個性から湧き出ているものなので、その個性がどういうものなのかというのはやっぱりある程度見ていないと、間違った環境づくりだったりとか間違った言葉がけをしたりとか、そういうことになると思います。

というのがあって、そういうのは気をつけているつもり。

アール・ブリュットがどれだけブームになって、いろんなところで、世界で評価されて
といっても、やっぱりそうっていない地方にいる作家さんとかが、やっぱり自分のあり
のままで創作できて、人生が楽しいというところが保証されていなかったら、あん
まり意味がないじゃないですか。

○河原 はい。

○米田 (笑) それだと本当に、ただ評価された人が上がって行って、周りの人が淘汰
されるというのだったら、今までの美術と一緒にですから。そうじゃないように、それぞれ
が、ちゃんと自分がここに関わってよかったというような人生、アートに関わってよかつ
たという人生を過ごしてほしいと思うんで、自分も含めて、自分も過ごしたいと思ってい
るし、そうだとしたら、やっぱりそういうちゃんとその人の個性、創作に対するその人の
持っているもの。

○河原 すごい何か根幹というか、米田さんと関わってきた方々、ココペリに今も創作に
いらっしゃる方々との関係で生まれたこの図を指標にしつつ、環境づくりとか、すごく丁
寧にされているということですね。

○米田 何かココペリも、ここじゃなくても、やっぱりいろんな子がいるわけですね。

○河原 ということですね。

○米田 たった十数人しかいないんですけど。

○河原 いろんな本当に、それこそアール・ブリュットといってもいろんな在り方がもち
ろんありますからね。なるほど。面白いな。

○米田 そうそう。そういうのをご家族にも伝えているので、ある人には「ここ、こうや
って描かなあかんよ」とかといって、具体的に指導したりとかする人もいますよ。で
も、それがえこひいきにならないので。いわゆる福祉の場だと、みんな同じ関わり方をし
なきゃならないとかとなってしまうがちなんです。(笑)

○河原 ということではないというか。

○米田 そうじゃなくて、個性に合わせた指導ということで、皆さんが一応共有して、そ
ういうものであるということを共有しているので、なので、なお自由が発揮されると。自
由度が。

○河原 何かまたココペリの面白い部分というか、特殊な部分が伺えたなど。なるほど。
ありがとうございます。

○米田 いえいえ。何か脱線ばかりしていますか、私。すみません。(笑)

○河原 いえいえ、まさに聞きたかったこと、制作するときに大事にしていることとかです。

○米田 ああ、そうでした、そうでした。

○河原 どんな工房なのかみたいなのところにすごく直結するお話で、すごくジャストでした。

このココペリさんがアートセンターとしても活動しているという、これがそのばーとのカタログになっているっていうことですよ。

○米田 そうですね、ばーとで出しているフリーペーパー。今ちょっと休んでいますけど。定期的に出していたやつですね。

○河原 ばーとの活動的には、富山県外の作品とか作家とも交流しながら、情報を発信したりイベントをしたりとか、そういうことになるんですか。

○米田 そうですね。特にもともと芸術活動支援センターというものの委託を受ける前に、既に県外の作品を集めたりとかということをやっていたので、もう既にネットワークみたいなのができている、むしろそれが生かされて、例えば東海・北陸ブロックの中で、その協力関係で展覧会をやったりとか、そういうところにつながっているんで、以前よりも、より具体的な各県の現状だったりとか、課題だったりとかというものの情報交換ができるようになったんで、それはすごくためになっていますね。

○河原 拠点としてのセンターがあることで、情報が入ってきたり、出しやすくなっているという。何か直近で課題感みたいなのってあるんですか、この東海・北陸エリアの。言える範囲で。(笑)

○米田 言える範囲で。(笑) やっぱり時代が変わって、そういう課題の中に権利保護というのがすごく増えてきたというか、権利保護の課題というのが。権利保護って一口で言っても、いろんな法律とか書類とかのところから、実際のいわゆるハラスメント的なものも入ってくるだろうし、何かいろんなことがあって、障害のある方の美術っていうのがいわゆるブームになれば、皆さんが関心を持てば持つほど、社会との接点というのが増えて、何かそういう課題とかも見えるものがすごく増えてきている。

○河原 なるほど。

○米田 だから、そういう点では、ここだけで考えていても難しいというか。だから、実際に法律家とかはいらっしゃるけれども、やっぱりほかのところでこういうことがあった

とかという、実際にあったことからこういうふうに改善していきましてというようなこと
ってすごく身になるので、そういうお話というのは。今は、そういうのはもう本当に情報
交換の中で大事ですよ、そういうことを共有するというのが。去年度にやった展覧会
は、やっぱりアンデパンダンで、誰でも出してもいいよというような展覧会をやったんだ
けれども、そのときはあえて持込みを条件にしたんですよ、作品を。

○河原 おお、なるほど。

○米田 作品を持ち込んでもらって、その作品の背景とか意図とか、あるいはサポーター
がどういうサポートをしたかとか、そういうところも含めて一人一人全部取材していった。

○河原 おお。

○米田 その上で展示するという。そういうような話もキャプションに生かしたりとかし
て。それはそのまま発掘にもなるし、作品とか作家の発掘にもなるし、今言ったちょっと
際々の作品でも、その作家の意図とかそういうものを知っていればまだ説明ができるので、
作品がいきなりどんとあって「これ、何だ」というところから始まるんじゃなくて、作家
さんとか。そのやり方をやっていけば、ある程度解消はできるというのはできるんだけど、
本当に……

○河原 確かに、作った人も、自分で持っていくって、何かちょっと責任感が出て、説明
するみたいな、ちょっと1個ハードルとも言えないけど。

○米田 さっきのトランク・プロジェクトの作品を選んでもらうというのと一緒に、結構
展覧会って、出して送って、飾ってもらってという、何か2段階ぐらいしかなくて、そう
じゃなくて、そこにやっぱり人同士が関わる場をつくりたい、障害者アートだからつくり
たいというのがあって、そこで持ち込んで取材するという。そこで作品のよさというもの
をみんな共有して、ちゃんと展示するというふうな段階を踏みたいという。普通だったら、
学芸員が企画展で普通にやっていることなんだけれども。

○河原 そうですね。

○米田 それがなかなかやっぱりできない部分があったんで。だから、最初、一緒に組ん
でいた人とかは、「いや、もう郵送にしてもらえば、もっとたくさん作品集まって、多様
的になるじゃないですか」みたいなことを言ったんだけど。(笑)

○河原 (笑) 何かもう既に絞られていく。

○米田 でもやっぱり、やった後で「やってよかった」って。作品の意味とか、そこにど
んな人がいるのかっていうのが見えるだけで、障害者アートというのは作品だけで今まで

見ていたんで、やっぱりそこに一步踏み込めてよかったというような。

多分、向こうもそうなんです。作品を展示しているところの人が何を考えているかというのを一步伝えることになるんで、そこで。それである程度は解消できるというのは、今、作戦としてですね。今後の戦略として。(笑)

○河原 (笑) なるほど。物すごく個人的なんですけど、僕もちょっと公募展の作品を見たり、その作家と会うみたいな機会が昔あって、作品だけ見ているときと、作品と作家を同時に見てしまうと、すごく、よりやはり面白さが増して、何かちょっと同じ見方ができなくなっちゃうみたいなときがあったんですけど、そういうのはどうですか。(笑)

○米田 (笑) いや、そうですね。

○河原 単刀直入に。

○米田 例えば普通の現代アートとかそういうところだと、そういう乖離ってあるかもしれないんだけど、障害者アートの場合って、むしろ接したことで得る情報のほうが作品を超えてくるというか。(笑)

○河原 そうですね。「何だ、これは」の作品の奥にいる、そのもとみたいな。(笑)

○米田 もと。もっと何か深い「何だ、これは」が出てきたりとか。

○河原 そうですね。

○米田 例えば、好きなロゴをクレヨンで描いて、それを何枚も何枚も描いて、全部接着剤で貼り付けて、かちこちの彫刻みたいなようなものにする。Aとかっていう文字だったりとか、そういうのを作っている人がいるんですよ、富山に。それは、持込み展のときに、その作品をがーっと持ってこられたんですね。それだけでも存在感がすごくて、すごいなと思っていたんだけど、それは福祉事業所の人が持ってきてくれたんですけど、家で作っていた作品だったんですよ。

○河原 ああ、なるほど。

○米田 それで、じゃあ作ったやつをどうするかっていったら、これが家のいろんなところに置いてあって、それを、本人が作ったものを眺めて、ほくそ笑んで過ごしているという。(笑)

○河原 (笑) すごいな。

○米田 そのエピソードがあるかどうかで、全然その作品の意味が変わってくるというか。

○河原 そうですね。そこまでが作品になっているんですね。

○米田 そうそうそう。障害者アートの世界って、日常の延長上にあるからこそ、作品が

鑑賞用のものとして完結していなくて、そこに地続きの何か行為が必ず混ざっているというか、その行為まで含めて作品として見るということをしていくことで、こっちでも目が鍛えられていくというか、そういう学びがあるんで。だから、それってそのまんま、いわゆる一般の作品を見るときもすごく生かされますよね、そういうのって。だから、物すごく勉強の場になるといいですか。

○河原 日々鍛えられているというか。(笑)

○米田 そうそうそう。(笑) だから、作品だけを見て、1回それで楽しむんだけど、やっぱりそこに踏み込んで、そこにある、横たわっている物語というのにも踏み込んでいって。ただ、その物語を作品として紹介するかどうかは、また別としてですね。

—了—